

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 3 年目)

1. 研究課題

現代 / 世界とは何か? — 人文学の視点から

2. 研究代表者氏名

小関隆、岡田暁生

KOSEKI Takashi, OKADA Akeo

3. 研究期間

2015 年 04 月 - 2018 年 03 月 (3 年度目)

4. 研究目的

本研究班は「第一次世界大戦の総合的研究」(2007~2015 年)の成果を引き継ぎ、それをより大きな現代史 / 20 世紀史の文脈で検討することを目的とする。「一体化した現代世界」をつくりだした「現代の起点」たる第一次大戦によって惹起された諸問題のあるものは克服され、あるものは 100 年 後の今日まで残存し、またあるものはその相貌を変えた。本研究班が検討の俎上に載せる具体的なテーマとして想定されるのは、デモクラシーの変容、グローバリズムとローカリズム / ナショナリズムの相克、パラミリタリ暴力とテロリズムの台頭、プロパガンダと大量消費社会のかかわり、テクノロジーの暴走、モダニズムの命運、等である。「近代」と「現代」の連続性と非連続性、あるいは両者 の地域的な相違も重要なテーマとなりうる。また、「人文学の視点から」というサブタイトルが含意 するのは、第一次大戦によって「ヨーロッパ諸学の危機」(フッサール)がもたらされた状況を受け、今日の人文学は現代 / 世界に対して何をいいうのか、という存在論的な問いである。

This project intends to further develop the academic achievements of the previous project, 'A Trans-disciplinary Study of the First World War', and to examine them in the larger contexts of modern/twentieth century history. As a foundational moment of the 'modern world', the First World War brought about various 'modern' questions, some of which have been resolved, while others remain unresolved. Some of them have changed their appearance, keeping their essence intact. Topics to be examined in our project are: the transformation of democracy, the changing relationship between globalism and localism/nationalism, the rise of paramilitary violence and terrorism, the rise and decline of 'modern' arts, the continuity and discontinuity

between 'kindai' and 'gendai', and so on. The subtitle of the project, 'from the viewpoint of humanities', implies an ontological question, that is: in the age following 'the crisis of European sciences' (Edmund Husserl), can humanities effectively tackle the questions posed by the 'modern world'?

5. 本年度の研究実施状況

本研究班の最終年度となる 2017 年度には、通常の例会を6回開催したのに加え、人文研アカデミーの一環として、広く一般に公開されるかたちの特別例会＝合評会を1回、さらに、フランスから研究者を迎えて特別例会を1回開催した。例会の開催はひとまず 10 月で終了、後期からは研究成果のとりまとめ・公刊に向けた打ち合わせに力点を置き、2018 年1月までに6回(8月8日、10月10日、11月16日、11月22日、12月12日、1月9日)の編集会議を開催した。その結果、研究班の成果を2冊の書物(山室信一編『人文学宣言』山室・岡田暁生・小関隆・藤原辰史編『現代・世界と人文学』、いずれも仮題)として刊行する方針となり、現在、出版社との交渉や執筆者との意見交換を進めている。2018 年度中に2つの成果の出版に漕ぎつけることが、現時点の見通しである。

7. 本年度の研究実施内容

2017-04-22 「核時代の歴史家：E.P.トムスンと核武装解除運動」 発表者 小関隆

2017-05-12 「ロベスピエールの政治思想の軌跡——共通の理性から道徳的快感へ——」
発表者 上田和彦

2017-05-27 セーブ・ザ・チルドレン、チャリティ、人道主義 ——エグランタイン・ジェブ伝を
中心に 発表者 金澤周作

2017-06-09 「八月の砲声」のこだまー第一次世界大戦勃発時の在ヨーロッパ日本人 発表
者 奈良岡聡智

2017-06-24 ウィーンのユダヤ人社会の消滅——ホロコーストとゲマインデ 発表者 野村
真理

2017-07-29 特別例会「公開合評会：アドルノ ラカン ——感性と理性の狭間で——」 発
表者 藤井俊之
発表者 上尾真道

2017-09-27 特別例会：ジゼル・サピロ講演会『ドイツ占領下におけるフランスの文学場』 発

表者 ジゼル・サピロ CNRS-EHESS

2017-10-06 「貯蓄と投資」と現代史 ―二つの世界大戦を接続する― 発表者 坂本優一郎

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	21 (6)	1 (1)	0	2 (1)	167 (51)	13 (13)	0	17 (8)
学内	4	5 (1)	0	0	0	15 (1)	0	0	0
国立大学	13	24 (4)	0	1 (0)	0	75 (28)	0	5	0
公立大学	12	1 (0)	0	0	0	0	0	0	0
私立大学	22	32 (11)	0	0	0	89 (38)	0	0	0
大学共同利用機関法人	0	0	0	0	0	0	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	1	5 (2)	0	0	0	42 (9)	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	4	4 (2)	2	1 (1)	0	21 (11)	3	5 (5)	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	57	92 (26)	3 (1)	2 (1)	2 (1)	409 (138)	16 (13)	10 (5)	17 (8)

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	12(0)
国際学術誌に掲載された論文数	0(0)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

2015 年に発足した本研究班は 2017 年度で最終年度となる。中間的な研究成果の公開は 2015 年 11 月 28～29 日の国際カンファレンスや 2016 年 11 月 4～5 日の国際フォーラムで行ってきたが、最終的には論集としてとりまとめることを予定している。論集の構想に関する話し合いは既に始まっており、特に 2017 年度後期に集中的に進めるつもりである。